

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）

研究期間：2017～2021

課題番号：17H04535

研究課題名（和文）エジプト西方デルタ コーム・アル＝ディバーウ遺跡の考古学調査

研究課題名（英文）Archaeological research at Kom al-Diba', West Delta, Egypt

研究代表者

長谷川 奏（Hasegawa, So）

早稲田大学・総合研究機構・招聘研究員

研究者番号：80318831

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,200,000円

研究成果の概要（和文）：初期文明とヘレニズム文明間の知の連続性を解明するために、アレクサンドリアの東方30kmに位置するコム・アル＝ディバーウ遺跡を選定し、古環境の復元を行う研究。砂丘集落の構造を捕捉した探査画像と分布調査の成果を総合し、遺跡周辺の古景観の復元考察を行った。さらに試掘調査の成果を受けて、遺跡の形成期（沖積世初め）から最も主要な活動期（ヘレニズム時代）に関わる歴史的な堆積層の構成が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまでアレクサンドリアを中心とする古典では見過ごされてきたメガシティ後背地の低地から経済活動と意義を問い直すものである。公開研究会における成果発表の討議で示されたように、地中海圏を代表する国際都市、地域的なメガシティと村落を視野に入れ、探査画像を利用しつつ遺跡の構造全体に踏み込む本研究の学術成果は、単に古典考古学の領域にとどまらず、中近世の歴史学や社会学とも連携が可能な議論となる。

研究成果の概要（英文）：The Mediterranean coast of Egypt has previously been overlooked as a research topic within the history of classical archaeology because the area has been viewed as a low-production waterfront. However, recent archaeological survey at the hinterland of Alexandria shows the positive economic activity. In Kom al-Diba' at the edge of Lake Idku, the settlement seems to be a "temple precinct", according to the geophysical research, and a group of archaeological objects show that its most active phase lies at the Hellenistic period. The ancient landscape of the site and its environmental areas are reconstructed through the study, and the layers of the site was grasped with the help of test trench excavations. In regard to the economic background of the area, as an intensive agriculture was not considered to be practical and its daily economic life may have been based on a "composite livelihood" model, dependent on part-time occupations. which will be testified by the coming excavations.

研究分野：中東古代末期の考古学、環地中海圏文明史

キーワード：エジプト 西方デルタ 低地 コーム・アル＝ディバーウ遺跡 ヘレニズム時代 神殿周域住居 生業複合 景観復元

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は、初期文明とヘレニズム文明間の知の連続性と断層を解明するために、これまで古典考古学史で見逃されてきた低地研究に焦点を当てるものである。研究対象地区としてアレクサンドリアの東方 30km に位置するイドゥク湖畔を選定し(図 1)、古環境研究とヘレニズム遺跡の発掘調査を通して生活文化の復元を行う。これによって、初期文明時代の巨大な前身伝統に対し、後発の外来政権として登場したヘレニズムが、西方デルタの地域権力を掌握していくプロセスの中で、潟湖民によって営まれた生活の実践知が把握される。地中海沿岸部を象徴する強い塩基性土壌により、集約的な農業を営むナイル流域とは異なり、脆弱な「生業複合」に依拠せざるを得なかった環境を把握し、生産性への可能性を阻まれながらも、自然を最大限活用した経済活動の実態を明らかにする。研究対象地域の一角にあるコム・アル=ディバウ遺跡では、本申請に先立つ研究による物理探査によって、発掘の前段階において既に集落の構成の大要が把握されている特殊な経緯があるため、この探査画像を調査に応用する手法をとることにより、イドゥク湖南域に形成された村落の構造と規模を効率的に把握する。党外の研究が始まった時代は、ドイツ・イタリア・イギリス隊等が、イドゥク湖沿岸で都市研究が大規模に展開し始めた時代でもあり、アレクサンドリアの後背地からのアプローチが、模索され始めた時期でもあった。

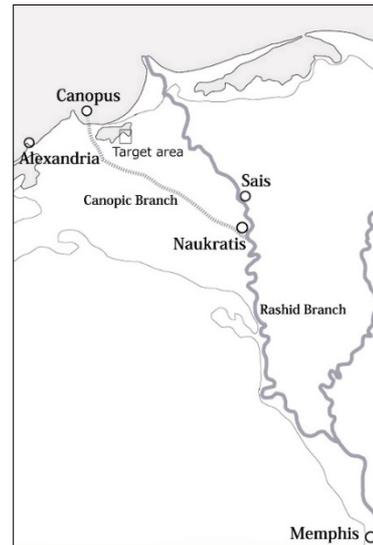


図 1: 研究対象地区の位置

2. 研究の目的

研究対象地区は、19 世紀以後に導入された通年灌漑制度の影響もあり、湖面範囲は約 1/3 に縮減したと推測される。さらに 1 万数千年前の気候変動によって形成された古砂丘では、標高の高い地点に集落が営まれ、経済活動の拠点となったと考えられる。現在では、旧湖面には養魚場が設けられ、古砂丘の殆どは削平されて果樹園に変貌した。そこで本研究では、申請者が長い研究蓄積を持つ衛星画像分析

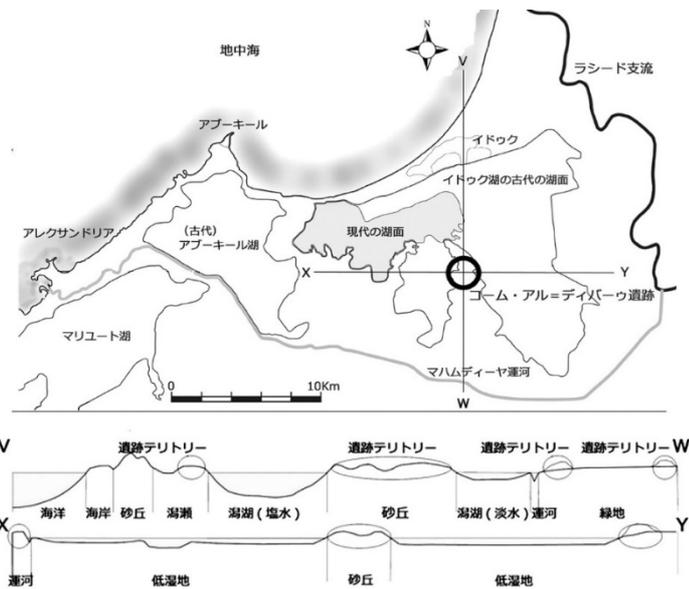


図 2: 研究対象地区の地理的特徴

（特にハイダム建設以前の 1960 年代の水環境を捉える米国偵察衛星 Corona と高解像度・合成開口レーダ解析能力を有する衛星画像との併用）と歴史地図情報の総合から、近代の始まりの時期の環境を復元し、ヘレニズム遺跡の分布との接点を捉える。これによってこれまでアレクサンドリア後背地のマリュート湖でしか行われこなかった沼沢地研究は、西方デルタ全域を視野に入れることが可能となる。本研究では、従来、地中海沿岸部の低地が、メガポリス

(カハ、アレクサンドリア等)に資源(人的・物的)を供給する場としてしか捉えられてこなかった画一的な見解に対し、ヘレニズム時代には低地の経済活動が砂丘上に形成された集落(図1)を含め、経済ネットワークの中で重要な働きをしていた点を提唱する。これによって、デルタ地域において、低地と複合した経済圏の意義を、古典考古学の場に訴えるものとなる。そこで本研究では、ヘレニズム政権の拠点都市アレクサンドリアに近接した低地(30km圏内)としてイ湖沿岸のコム・アル・デ・イハグ遺跡を選定し、以下の3点を柱とした分析を行う。

3. 研究の方法

研究対象地域は、これまで申請者らが環境復元を積み重ねてきた場であり、その研究蓄積を最大限に活用する。探査画像で判読されたデータでは、丘陵頂部から中腹に近い位置では、南側方向に入口をもつナオス(祠堂)を有する神殿遺構の基礎がみつかり、壁厚140cmを測る周壁に用いられた日乾煉瓦の規格(36~38cmL)から、プトレマイオス王朝時代(前4~1世紀)の建造を考える。この神殿遺構は標高の最も高い場所にあるため、丘陵頂部はアクロポリス的に利用され

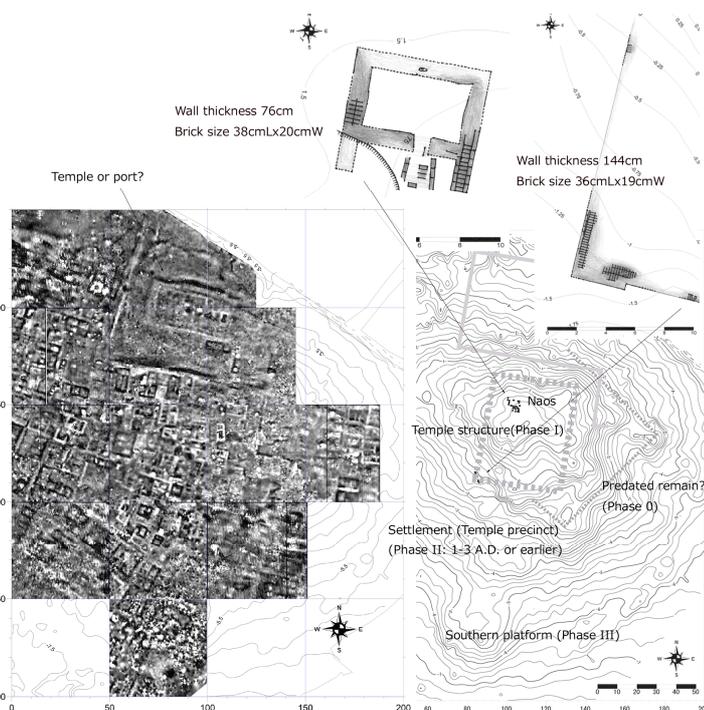


図3: 研究対象遺跡の物理探査図と遺跡構造の推測

ていたと思われる、集落は祭祀施設の周囲に営まれた典型的な神殿周域住居(Temple Precinct)と推測される(図3)。こうした構造を見通した上で、ドク湖全体と、河畔にあるコム・アル・デ・イハグ遺跡における古環境を復元していく。具体的には、以下の3点を主要な手法とする。

- ① 衛星画像を利用して砂丘利用のあり方を分析し、これに歴史地図情報を加えて、近代直前までの自然環境を探り、ヘレニズム時代の環境復元の手掛りとする。
- ② これまで行った遺跡探査(磁気探査)の成果を活用して、集落構成の全体像を見通した効率的な発掘調査を行い、ヘレニズム村落の構造と規模を推測する。
- ③ 試掘調査で得られる層位の分析等から、遺跡の活動時期に関わる歴史的年代軸を考える。

4. 研究成果

コム・アル・デ・イハグ遺跡の探査画像は、日乾煉瓦住居が密集した集落を示していると思われる、さらに家屋・竈等の施設・家畜小屋・倉庫・広場・街路等が含まれていると考えられる。集落は丘の南~西側に集中しており、概ね東西方向よりやや傾く規則的な軸線を有す。地表面に分布する遺物(ローマランプ、東方ギリシャ土器、アンフォクス等)の年代から、集落の最も活発な活動時期は、ローマ時代(後1~3世紀)にあると推測された。

また丘の麓の南側部分では、住居の軸線がやや北側に傾くが、ここには多くの焼成煉瓦片が分布しており、ビザンツ時代に年代づけられる可能性がある。このような所見を積み重ね、

コム・アル・ディハ¹の遺跡の遺跡環境復元図を作成し(図4)、さらに遺跡東方の砂丘列とさらにその東のラシード支流沿岸部の古景観を復元し、それらの成果は国内・海外の学術研究の場で報じられた。分布調査を完了したことを受けて、発掘調査の前段階の試掘調査が許される運びとなり、2019年と2021年には東西20m×南北20mの400m²のエリア内で、

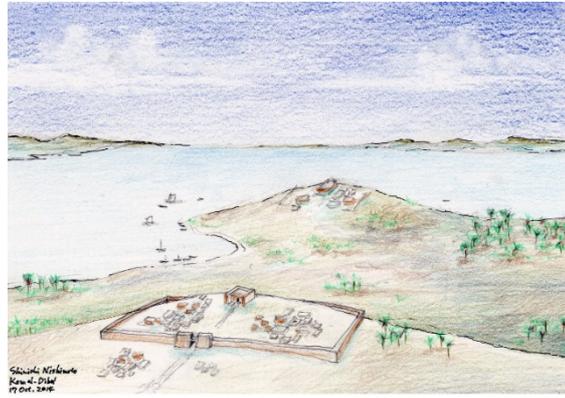


図4: 研究対象遺跡の景観復元図

計32の2.5m×2.5mのグリッドを対象に、地表面から無遺物堆積層になるまで掘り下げを行った。これらのグリッドの層位は、以下の3層に分類された(図5)。第I層はシルト層であり、地表面からおよそ-110/-130cmの深さまで堆積している。このシルト層の中には、塩分の粒子が密にみられるものや、土器片に加え、炭化物・石膏紛・煉瓦片・骨片の混入が極めて顕著に観察されこれまでの分布調査で地表面から取り上げられた遺物から観察される年代観に近い位置にあると考えられた。また出土したアンフォラ把手には、ロードス地域との交渉を窺わせる遺物が含まれており、神殿周域住居の形成年代を考えていく重要な資料となった。第II層は、-110/-130cmから-180/-210cmまでの位置に堆積する層で、ごく部分的にシルト土や土器片などが混入する砂層であるが、焼土などが残る面はみられず、最初期の形成層と位置付けられた。そして-180/-210cm以下が第III層であり、黄色の風成砂からなる無遺物層であり、発掘の開始に先立って、これらの層堆積が把握された。



図5: 研究対象遺跡の試掘トレンチ内層堆積のセクション

<参考文献>-----

- So Hasegawa and Shin-ichi Nishimoto, “Recovering the landscape of the waterfront at Lake Idku: Archaeological survey at Kom el-Diba” eds by A. Wahby and P. Wilson, *The Delta Survey Workshop: Proceedings from Conferences held in Alexandria (2017) and Mansoura (2019)*, London, 2022/7, pp.55-64.
- So Hasegawa and Shin-ichi Nishimoto “Lost landscape of the waterfront on the Mediterranean coast of Egypt: East of Lake Idku”, S. Nakamura, T. Adachi, M. Abe (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Western Asian Archaeology in Honor of Sumio Fujii*, Rokuichi Shobou, Japan, 2019/2, pp. 329-336.
- So Hasegawa “Recovering Evidences of Ancient Economic Activity in the Lowlands of the West Delta: A Hellenistic Village Site and Its Surrounding Landscape” *Sophia Journal of Asian, African and Middle Eastern Studies*, Institute of Asian, African and Middle Eastern Studies, Sophia University, No.35, 2017/12, pp.53-66.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 長谷川奏	4. 巻 vol.2022
2. 論文標題 「古代末期における西方デルタ・イドゥク湖沿岸の景観復元」「古代末期～初期イスラーム時代における紅海沿岸港湾都市の景観復元」「その他：メンフィスの水辺景観の復元」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山田重雄編『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究』つくば大学	6. 最初と最後の頁 111-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川奏。	4. 巻 vol.13
2. 論文標題 「ナイルの水辺に息づいた古代世界 - 文明の重層性に対するアプローチ - 」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『研究東洋』東日本国際大学東洋思想研究所	6. 最初と最後の頁 81-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川奏	4. 巻 2022/3,
2. 論文標題 「砂丘景観の形成と遺跡テリトリー - コーム・アル=ディパーウ遺跡の堆積層から - 」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山田重雄編『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究』つくば大学。	6. 最初と最後の頁 pp.149-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川奏・西本真一・恵多谷雅弘	4. 巻 2022/3
2. 論文標題 「ヘレニズム村落の構造を探る エジプト・イドゥク湖沿岸コーム・アル=ディパーウ遺跡の考古学調査(2021)」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本西アジア考古学会主催第29回西アジア発掘調査報告会報告集(http://jswaa.org/wp/wp-content/uploads/2022/03/a4f2ee1b1ead41b29699cf28df471122.pdf)。	6. 最初と最後の頁 pp.1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 So Hasegawa	4. 巻 2021/3
2. 論文標題 “ Interim Report on the Recovery of City/Village Landscape at the Hinterland Waterfront of Alexandria ”	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山田重雄編 『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究』つくば大学。	6. 最初と最後の頁 pp.179-191.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川奏、西坂朗子	4. 巻 vol.27
2. 論文標題 「エジプト・デルタ地域における文化財保存の課題 - プハイラ地方コム・アル=ディパーウ遺跡調査の現場から - 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『発掘報告会報告集』日本西アジア考古学会	6. 最初と最後の頁 pp.137-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 So Hasegawa and Risa Tokunaga	4. 巻 vol.1
2. 論文標題 “ Preliminary Report of the First Season of the Saudi-Japanese Archaeological Mission in al-Hawra ', Umluj and its Hinterland: March 2018 ”	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Archaeological Research at al-Hawra ' : Medieval Port Site at the Red Sea Coast of Saudi Arabia	6. 最初と最後の頁 pp.1-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川奏	4. 巻 --
2. 論文標題 「ナイル・デルタの景観復元：アレクサンドリアの後背地域を事例に」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『研究成果報告2018年度 都市文明の本質 古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際的研究 』山田重郎編、筑波大学	6. 最初と最後の頁 pp.103-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 So Hasegawa and Shin-ichi Nishimoto	4. 巻 --
2. 論文標題 "Lost landscape of the Waterfront on the Mediterranean Coast of Egypt: East of Lake Idku"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 S. Nakamura, T. Adachi, M. Abe (eds.), Decades in Deserts: Essays on Western Asian Archaeology in Honor of Sumio Fujii, Rokuichi Shobou	6. 最初と最後の頁 pp.329-336.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川 奏	4. 巻 25巻
2. 論文標題 エジプト西方デルタ・イドゥク湖南域の考古学調査(2017) - コーム・アル=ディバーウ遺跡北丘陵の調査 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西アジア発掘報告会報告集	6. 最初と最後の頁 112-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川 奏、村上夏希、桐野文良、二宮修治	4. 巻 10巻
2. 論文標題 自然科学的手法によるイスラーム文化形成期の技術革新の解明 - エジプト出土のファイユーム陶器を事例に -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 イスラーム地域研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 46-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 長谷川 奏	4. 巻 8巻
2. 論文標題 イスラーム世界における生活文化の多様性 - ナイル・デルタの湖沼地帯から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 研究 - 東洋 -	6. 最初と最後の頁 86-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 So Hasegawa	4. 巻 vol.35
2. 論文標題 Recovering Evidences of Ancient Economic Activity in the Lowlands of the West Delta: A Hellenistic Village Site and Its Surrounding Landscape	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Sophia Journal of Asian, African and Middle Eastern Studies	6. 最初と最後の頁 53-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 長谷川奏	4. 巻 24巻
2. 論文標題 エジプト西方デルタ コーム・アル=ディパーウ遺跡出土のヘレニズム土器 - Eastern Sigillata A Ware をめぐって -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ヘレニズム・イスラーム考古学研究	6. 最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上夏希、二宮修治、桐野文良、長谷川奏	4. 巻 24巻
2. 論文標題 エジプト出土初期イスラーム陶器の製陶技法 - 胎土調合法の検討から -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ヘレニズム・イスラーム考古学研究	6. 最初と最後の頁 48-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 長谷川奏
2. 発表標題 「生活文化の多様性を探る - エジプト・デルタ地帯の考古学 - 」
3. 学会等名 東日本国際大学 第5回公開研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長谷川奏・西本真一・恵多谷雅弘
2. 発表標題 「ヘレニズム村落の構造を探る エジプト・イドゥク湖沿岸コム・アル=ディパーウ遺跡の考古学調査(2021)」
3. 学会等名 日本西アジア考古学会、第29回西アジア発掘調査報告会(広島県民文化センター、対面・オンライン併用)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長谷川奏
2. 発表標題 「アレクサンドリア後背地のウォーターフロントにみる都市村落景観」
3. 学会等名 つくば大学主催 第7回研究会『ヘレニズム時代におけるエジプトの都市の景観と構造』(2020/10/18: オンライン発表)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長谷川奏、西坂朗子
2. 発表標題 「エジプト・デルタ地域における文化財保存の課題 - プハイラ地方コム・アル=ディパーウ遺跡調査の現場から - 」
3. 学会等名 日本西アジア考古学会、第27回発掘報告会(古代オリエント博物館)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 So Hasegawa , el-Said Abbas Zaghoul and Gad el-Qady
2. 発表標題 “Recovering the Hellenistic Village Landscape: Archaeological Survey at Lake Idku ”
3. 学会等名 6th International Workshop for Enhancement of Egypt-Japan Joint Research Projects of Egypt , NARSS (National Authority for Remote Sensing and Space Sciences) (NARSS Conference Hall) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 So Hasegawa
2. 発表標題 "Hellenistic Village Site at Kom al-Diba', Buhaira: Reconstructed Images of the Landscape at the South of Lake Idku"
3. 学会等名 International Workshop, The 6th Delta Survey Workshop by EES (Egypt Exploration Fund) (Mansura University, Egypt (国際学会))
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 So Hasegawa .
2. 発表標題 "Scientific Perspective on "Fayyumi" Pottery: How Technological Tradition Was Inherited (or Discarded) from Late Antiquity to Early Islamic Period"
3. 学会等名 International Symposium, Coptic Heritage under the shadow of Islam by Comiittee (Fayyum University) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 So Hasegawa
2. 発表標題 "Recovering Ancient Landscape at the Lake Idku Waterfront: Hellenistic Village Site at Kom al-Diba' "
3. 学会等名 Cross Disciplinary Research, E-JUST(Egypt Japan University of Science and Technology), HQ, Room no.207, New Borg El-Arab City, Alexandria, Egypt, 2018/9/6
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長谷川奏
2. 発表標題 「ナイル・デルタ砂丘集落の景観復元：コーム・アル＝ディバーウ遺跡」
3. 学会等名 日本西アジア考古学会第23回大会、金沢歌劇座、2018/6/16,17 (大会要旨集pp.9) (ポスター発表)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長谷川奏
2. 発表標題 エジプト西方デルタ・イドゥク湖南域の考古学調査(2017) - コーム・アル=ディパーウ遺跡北丘陵の調査 -
3. 学会等名 第25回西アジア発掘報告会、日本西アジア考古学会、古代オリエント博物館、2018/3/25
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長谷川奏
2. 発表標題 エジプト西方デルタ コーム・アル=ディパーウ遺跡出土のヘレニズム土器 - Eastern Sigillata A Wareをめぐって -
3. 学会等名 第24回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会、金沢大学地域連携推進センター、2017/7/8
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村上夏希、二宮修治、桐野文良、長谷川奏
2. 発表標題 エジプト出土初期イスラーム陶器の製陶技法 - 胎土調合法の検討から -
3. 学会等名 第24回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会、金沢大学地域連携推進センター、2017/7/8
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村上夏希、長谷川奏
2. 発表標題 保存科学的手法による材質調査 初期イスラーム時代におけるエジプト陶器の技術変遷
3. 学会等名 東洋陶磁学会平成29年度第1回研究会、東京藝術大学美術学部中央棟2階第5講義室、2017/6/3
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村上夏希・二宮修治・桐野文良・長谷川奏
2. 発表標題 初期イスラーム時代におけるエジプト施釉陶器の展開 - 保存科学的視点からの検討 -
3. 学会等名 東洋陶磁学会第45回大会<自然科学系の東洋陶磁研究報告>、多治見市産業文化センター、2017/10/21
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 So Hasegawa and Shin-ichi Nishimoto	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Archaeopress Publishing Ltd., London	5. 総ページ数 10
3. 書名 “Recovering the landscape of the waterfront at Lake Idku: Archaeological survey at Kom el-Diba” eds by A. Wahby and P. Wilson, The Delta Survey Workshop: Proceedings from Conferences held in Alexandria (2017) and Mansoura (2019)	

1. 著者名 長谷川奏	4. 発行年 2020年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 251
3. 書名 「古代末期のメンフィス水辺景観に関する若干の覚え書き 考古学とリモートセンシングのコラボレーションのために」 pp.160-166、吉村作治編『オシリスへの贈り物 - エジプト考古学の最前線 - 』	

1. 著者名 長谷川奏	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 462
3. 書名 初期イスラーム文化形成論 - エジプトにおける技術伝統の終焉と創造 -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

(評論)

・丸善

長谷川奏「地中海域」鈴木董、近藤二郎、赤堀雅幸『中東・オリエント文化事典』丸善出版株式会社、2020/11、pp.26-27。

・長谷川奏「自著を語る 『初期イスラーム文化形成論』 」『地中海月報』地中海学会、417号、2019/2、p.7。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西本 真一 (Nishimoto Shin-ichi) (10198517)	日本工業大学・建築学部・教授 (32407)	
研究分担者	西坂 朗子 (Nishisaka Akiko) (30454193)	東日本国際大学・エジプト考古学研究所・客員教授 (31604)	
研究分担者	津村 宏臣 (Tsumura Hiroomi) (40376934)	同志社大学・文化情報学部・准教授 (34310)	
研究分担者	津村 眞輝子 (Tsumura Makiko) (60238128)	(財)古代オリエント博物館・研究部・研究員 (72601)	
研究分担者	恵多谷 雅弘 (Etaya Masahiro) (60398758)	東海大学・情報技術センター・技術職員 (32644)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	近藤 二郎 (Kondo Jiro) (70186849)	早稲田大学・文学学院・教授 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関